

目次

1章 動詞 — (日本語の) 自動詞・他動詞と vi・vt

1. 序論	2	・「形容詞+名詞」を活用する表現法について	3
		・強い vt であるにもかかわらず vi となることがある	6
2. vi について	9	2-1. 受動的な意味を表す vi	10
3. vt について	13	3-1. 再帰用法 = vt の (意味の上での) vi 化 (= 転換自動詞 converted intransitive)	14
		3-2. 形だけの目的語を必要とする vt	17
4. how と what と why の使い分け	4-1.	what か how か	17
	4-2.	how か why か	20
5. 疑問詞と前置詞	20		
6. 分詞について	6-1.	現在分詞	① vi の現在分詞 21
			② vt の現在分詞 23
	6-2.	過去分詞	③ vi の過去分詞 23 完了の意を表す「be + vi の過去分詞」 25
			④ vt の過去分詞 25
7. 分詞・形容詞が単独で名詞を後ろから修飾する例	26		
8. 文型について	29		
9. 「vt+副詞」か「vi+前置詞」か	32		
10. say と tell、speak と talk	34		
11. 動詞に関するルールあれこれ		・目的語の内容・種類を使い分けなければならない例	37
		・特別扱いの動詞 have (と be-動詞)	38
		・「よい意味の動詞」、「悪い意味の動詞」という単純な思い込みは禁物	40
		・名詞をそのまま動詞化	40
		・誤用されやすい動詞	
		come と go	41
		doubt と suspect	42
		influence と affect と effect	42
		forget と leave	43
		「intended to have+過去分詞」について	43
		目的語が長いときには特に、目的語を vt の直後には置かない (= 副詞句が 割り込む) ことが多くなる	44
		動詞の省略	44
		目的語の省略	45

2章 使役動詞・知覚動詞とその関連表現

1. 使役動詞とその関連表現	2		
1-1. S + 使役動詞 + O (主に人) + 原形不定詞. の文型に関して	2		
a. make, have, let	b. get, cause, force, compel	c. help	これらに関する注意点
1-2. S + 動詞 + O (主に物) + 過去分詞. の文型に関して	5		
1-3. 「使役」以外の意味を表す例	7		
2. 知覚動詞	11		
2-1. S + 知覚動詞 + O + 原形不定詞.	11		
2-2. S + 知覚動詞 + O + 現在分詞.	11		
2-1 と 2-2 の違いについて	11		
2-3. S + 知覚動詞 + O + 過去分詞.	12		
不定詞および原形不定詞という名称について	13		

3章 助動詞

1. shall について 2
2. will について 2
3. 進行形のかたちで「進行」以外の意味を表す例について 4
 - 3-1. be going to-不定詞 及び be -ing について 4
 - 3-2. 進行形が表すその他の意味 11
 - 3-2-1. 「一時的な状態」を表す 11
 - 3-2-2. 「いや増す程度」を表す 12
 - 3-2-3. 繰り返される行為を表し、そのことに対する「いらだち」や「非難」を表すことも多い 12
 - 3-2-4. 「命令」や「拒否」を表す 13
 - 3-2-5. 「丁寧」な表現となる現在進行形・過去形・過去進行形 13
4. be to-不定詞 15
5. must と have to の区別 19
6. その他 22
 - ・否定の推量の can't と must not の違い 22
 - ・can と may の違いについて 22

4章 副詞

1. 副詞が修飾するもの 2
2. 副詞の位置 5
 - 2-1. 副詞の基本的な配置規則 5
 - 2-1-1. 一般論（副詞は被修飾語のできるだけ近くに置く） 5
 - 2-1-2. 動詞を修飾する副詞の位置（最も一般的な配置パターン） 8
 - ① 動詞の直前に置きますが、be-動詞（連結動詞）であればその直後に置きます。 8
 - ② 助動詞があれば、最初の助動詞の直後に置きます。 8
 - ③ 分詞・形容詞との結びつきの方が強い場合には、それらの直前に置かれます。 9
 - ④ 副詞関連語句を一体としてまとめる 11
 - 形容詞の enough について 11
 - 重言（じゅうげん）《tautology》について 13
 - ⑤ 副詞が後ろから前の名詞を修飾する例 15
 - ⑥ その他の注意点 17
 - much と very の使い分け 19
 - 比較級、最上級を修飾できる主な副詞 21
 - not と never の使い分けについて 21
 - 2-2. 副詞の意味カテゴリーによる位置の違い 23
 - 2-2-1. 時・時点、時間・期間、時間的前後関係、あるいは場所などを表す副詞 23
 - 2-2-2. 発信者の考えを述べたり、これから述べる内容を提示したりするための副詞（＝文修飾の副詞）の位置 23
 - ① 接続詞的な働きをする。 24
 - ② これから述べる内容の分野を明示する。または、どういう観点から述べるのかを明示する。 24
 - ③ 発信者の考えや主観的な評価を述べる。 25
 - rather や quite などについて 26
 - ④ 発信者の気持ちや感情を表す。 30
 - 文修飾の副詞の位置 31
 - 2-2-3. 様態（＝物事のありかたや行為のありさま）を表す副詞の位置 32
 - 2-2-4. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」、あるいは「主語の感情や意志を表す副詞」の区別 34
 - 2-2-4-1. 副詞と形容詞による文意の区別 34
 - 2-2-4-2. 「主語の感情や意志を表す副詞」について 35
 - 2-2-4-3. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」の、位置による区別 35

5章 分離不定詞

6章 部分否定 (=不完全否定)

序論	2
「部分否定」という文法用語の問題点について	3
多寡を相対的に言うときの not many 及び a few について	7
否定文中での and	9
否定文中の or	11
肯定文中での and と or	15
and/or を用いた表現	18
譲歩を表す and と or	18
同格や追加説明を表す or	20
both について	22
all について	22
否定文中での because-節について	23
コンマの重要性について	24
否定文中での because-節以外の節の扱いについて	26
否定文中での as-節について	26
否定文中での like (前置詞・接続詞) について	30
参考: 否定の日本語文中での「~のように」他、まぎらわしい表現について	31

7章 仮定法

1. could と was able to ... の違いと、過去時制の could と仮定法過去の could について	2		
2. could have と could not have について	10		
3. 丁寧表現・婉曲表現など	13	過去形・過去進行形による丁寧表現	13
4. 依頼をするときの表現	14		
5. if-節を使わない仮定法	16		
6. 仮定法の倒置	18		
7. 普通の条件節に近い仮定法	20	as if や if only のあとには、現在形を置くこともあります。	20
		as if + as ... as 構文	21
8. should, were to について	23		
9. その他	24	I wish S' V. について	24
		that-節中での should、あるいは仮定法現在などについて	26
		仮定法+比較	27
		過去形と過去完了形	28

8章 文の構造と文章の組み立て方の特徴

1. 英語での「文」の組立て方の特徴 (=「結論や主題・テーマ等を早く言う」ための表現法)	3
1-1. Yes か No かの明示	3
1-2. 否定文か肯定文かを早く明示する	6

① 否定語が繰り返る例	6
② 否定語の繰り返しができない例	8
③ not A but B における not の繰り返り	9
④ 比較の構文における否定語の繰り返り	11
⑤ 否定的な内容を表す副詞句の繰り返り	11
1-3. 文型や文の構造をなるべく早く明示する	12
① 形式主語や形式目的語を用いるなど	13
② 不定詞の意味上の主語について	15
③ 動名詞・名詞・名詞句・名詞節を受ける形式主語	19
④ 強調構文	20
⑤ 形式主語のようであって形式主語ではない例	20
⑥ 英文でも主部が長くなるなど、例外もある。	20
1-4. 主役（主語・目的語・補語）を明示するために、先行詞と関係詞節、あるいは同格を表す名詞節を分離するなど、長い修飾語は後置させる。	21
1-5. 倒置させる。	23
1-6. その他	23
2. 「結論を早くは言わない」日本文	24
翻訳文の例	29
複数の修飾語を並べるときの留意点	36
わかち書き	38
3. 英語での「文章」の組立て方の特徴（＝「結論を早く言う」ための表現法）	48
3-1. 論の展開の仕方	48
3-2. パラグラフ	58
3-3. 前出の語・内容を受けることを優先する	60
受動態について	64
倒置について	66
話の流れをよくする	67
文末・文頭に置いて強調する	68
4. 同じ言葉の繰り返しを嫌う	69
5. 類義語・同義語の反復（並べて意味を強める）	75
6. 英語と日本語の語彙について	77
6-1. 序論	77
6-2. オノマトペ	81
6-3. 生活文化とその言語	83
6-4. 同音異義語と多義語の違い	85
6-5. 英語での造語のしかた	86
6-6. 同音異義語	89
6-7. 多義語	90

3-2. 形だけの目的語を必要とする vt

We would **appreciate it** if you paid [would pay] promptly. (すぐにお支払いいただければありがたく思います。)

appreciate はほぼ vt として用いるので (本章 1-13 下を参照)、この it がなければ、if 節が目的語 (=名詞節) となって、「~かどうか」の意になってしまいます。この it は文法的整合性をとるために置くもので、たいした意味はない、いわゆる「漠然とした状況を表す」ものです。appreciate **it** は、再帰用法の場合と同じく、vt である appreciate を vi 化するためのものと言うこともできます。

他方、Do you **mind if I smoke here?** のような例は、「vt+名詞節」にも「vi+副詞節」にも分類されていて、辞書等でもどちらかにはっきりとは決められないようですが、Do you mind **it** if I smoke here? と、it を入れることは普通はしません。

I wonder if [whether] it will rain. 「雨が降るかしら」は「vt +名詞節」に分類されます。同じく、I wonder **it** if it will rain. とはしません。

※ Do you mind if I **used** your car tonight? や I wonder if [whether] I **could borrow /use/** your portable phone. の例のように、if 以下を仮定法にすることもあります。

※ I wonder if he is over fifty. 「彼は 50 は過ぎていないと思う」の例について、『ジーニアス英和大辞典』では、「if 節中の肯定・否定が意味上逆転する。I think he is not over fifty. の含みがある」としています。if 節が否定になる I wonder if [whether] he isn't over fifty. は、I think he is over fifty. に相当するとしています。

if 節ではなく that-節が vt の目的語となると、その that-節を受ける形式目的語の it を前に置くことがよくあります。その目的は、文型を (早く) 明示するためや、文法的整合性をとることです。→ 8-13

He made **it** known to his friends **that he was going to marry her.** のような例が、文型を明示するための例です。

「文法的整合性をとる」と言うと難しく聞こえるかも知れませんが、簡単には「文法的調整のため」ということです。たとえば see (to it) that SV や look (to it) that SV 「S が V するように気をつける」で it を置くのもそれにあたります。

that-節を前置詞の目的語にできるのは、in that SV, except that SV, but that SV, save that SV のときであって、to の目的語にはできないというルールに従って、see (to it) that SV のような少々面倒なかたちとなります。

I saw to it that things were done as he wished. (彼が望むように物事がなされるように私は配慮した。) → 26-6

次のような例では、it は直後の that-節を受けるので、文型をはやく明示できるとも言いかねますが、it のあとに必然的にポーズが入るために、情報の受け手は that-節の内容に集中できる、つまり、発信者は that-節の内容を強調することができる、ということになります。I resent (it) that she did that. I can't help it (that) he doesn't like me. → 26-7

4. how と what と why の使い分け

4-1. what か how か

What do you **feel** about it? は「まれ」→ **How** do you **feel** about it? が普通。

How do you **think** about it? は「非標準」→ 正しくは **What** do you **think** about it? 『ジーニアス英和大辞典』より **feel** には vt もあるものの、このような場合には vi として用います。つまり、その「感じ方」を問うために疑問副詞の **How** を用いるのが普通で、vt の **think** に対しては、その目的語である疑問代名詞の **What** を用いるのが正しいということです。

※ いずれの例でも、副詞句の about it は「おまけ」にすぎません。about を of に代えても同じです。

What do you **think** of things in general? (一般情勢をどのようにお考えですか。)

※ 『オーレックス英和辞典』の、ネイティブスピーカー100人に対する複数解答のアンケートでは、**How** do you **think** about his idea? を使うと答えた人は1人に過ぎず、**What** do you **feel** about his idea? を使うと答えた人は11人です。また、同辞書では「学習者への指針」として、「客観的意見を聞く場合は What do you think about ...?、主観的意見を聞く場合は How do you feel about ...? を使う